

4. 春シーズンを終えて

2017年春シーズンを終えて

監督 萩 井 好 次 (H10年卒)



これまで長年レギュラーを務めた昨年の4年生が卒業し、選手も指導体制も一新した状態で今年の春シーズンをスタートしました。特に注力した以下の3点について私見を述べさせていただきます。

1) フィジカル強化

昨年の最終戦で改めて痛感させられたフィジカル面での差を埋めるべく、筋力値や体格値の向上を強化の中心においてきました。今期から大学の施設で大島トレーナーが常勤してくださっていることもあり、日本の大学の中で一番伸びたと言えるぐらい数値面での改善を遂げることができております。他大学は長年この分野に注力しており、一朝一夕で埋められるものではありませんが、チームの文化として改めて根付かせられるよう継続していきます。

2) コンタクト強化

グラウンド面では特にブレイクダウンやタックルなど、ボールを持たないプレーを中心に強化を行っております。ランニングやハンドリングといった同志社の伝統的な良さを更に活かすためには、これらのボールを持たないプレーでどれだけ相手を上回れるかが非常に重要になります。この分野も非常に時間がかかることですが、継続して取り組んでいきます。チームのために惜しみなく体を張れる選手の姿を秋シーズンにお見せします。

3) FW強化

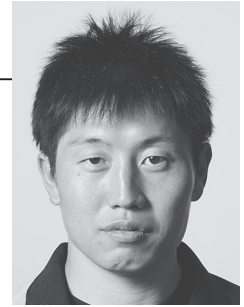
昨年に引き続き、この春シーズンもスクラムが大きな課題になりました。また、スクラムに時間を取られる分、モールなどのFW強化も遅れています。6月末のラグビー祭、天理大学にトライ数6本 vs 1本。取られたトライはスクラムトライが3本、ラインアウトモールが3本。ここを変えることができればすべての結果が変わります。経験上、いずれも年月をかけた絶対的な練習量が重要になります。学年やチームのグレードに関係なく、FW全員で共通の課題を克服し新たな同志社を作るべく練習量にこだわります。絶対的な「量」から「質」が生まれ、積み重ねることでFWの新たな「文化」をチームに根付かせます。

「センスのある」「華麗な」「BK」「AT」こんな言葉だけで形容されているうちは同志社に未来はありません。「努力した」「泥臭い」「FW」「DF」こうした言葉で表されるのが本当の同志社です。同志社の試合を見た高校生や中学生が「同志社のFWとしてスクラムを組みたい」と思い、躍動するBKを見て「いつかコングレを着て走りたい」とラグビーを始める子供が増える。同志社の未来は今の現役の努力にかかっています。あとは時間との勝負。残された時間との戦いに勝ち最高の準備をして秋シーズンに向かいます。

これからも野中組にこれまでと変わらぬご支援とご声援を宜しくお願い致します。

2017年春シーズンを終えて

BKコーチ 飛野 達 (H19年卒)



平素は多数の皆様から多大なるご声援・ご支援を賜わりまして、心より御礼申し上げます。

今年度より指導体制が刷新され、チームとしては、特にフィジカル面の強化、コンタクト力の強化にフォーカスを置いて取りくんで参りました。BKにおいては、春シーズンは基礎プレーを中心に、1st phase ATの精度UP、ATシェイプのオーガナイズ力の向上を目指して、練習を重ねてきました。しかし、まだまだコミュニケーション力や基礎スキルの面で課題が多く、更にハードな状況でのミスも多く、この点について改善が必要だと考えております。同志社のBKは華麗だと形容されがちですが、現代ラグビーにおいて華麗なだけのBKは全く脅威ではありません。同志社のBKは上手だけど、体を張り、キツイ状態でも足を止めない泥臭いプレーが目立つと言われるようにならないといけない時代になってきました。痛くてキツイプレーをBKが率先してできるようにならないといけません。まだまだ甘えの見えるBKの学生達には夏合宿を通じてこの部分を更にレベルアップしてもらう必要があると考えております。

7人制については、昨年度から本格的に練習を開始し、今年度も継続してプレーをする選手が多く、7人制の理解度も上がってきました。春シーズンのチームフォーカスがフィジカル面の強化であった為、昨年度ほど7人制専用の練習を実施することができませんでしたが、限られた時間の中でもハードな練習に取り組み、負荷のかかったキツイ状態でも、足を止めずに規律を守り、精度の高いプレーをやりつづけ、意識高くハードワークしてくれました。昨年度は7人制でも関東の大学にブレイクダウンで完敗しましたが、今年度はひけをとらず戦うことができ、チームとしての取り組みも7人制の結果に結びついています。

関西セブンズフェスティバルではSEVENS DEVELOPMENT SQUADに次ぎ準優勝、JAPAN SEVENSでも昨年度敗れた大東文化大学には完勝、早稲田は寄せ付けず、トヨタ自動車ヴェルブリッツにも肉薄し、ベスト4という結果を残すことができました。しかし、あと1点、2点で勝ちきれないのが現状の同志社の実力です。日々の取り組みの差だと考えています。敗戦後のロッカールームでは学生達から「また正月ここに戻ってこよう」「7人制メンバーがハードワークでチームを引っ張っていこう」と発言があり、夏合宿では「いかに自分にベクトルを向けて日々の練習にハードワークで取り組めるか」を、学生達と共に頑張ってもらいたいと思います。

今後とも、ラグビー部へのより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。